

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県公立学校講師)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

宿題は仕上げる必要はない

以前は、漢字や音読を宿題にしていました。漢字は手本を見て写すだけ、音読は教科書に書いてある文字を読むだけです。いずれも家庭で、教師の支援を受けずに自力で行うことが可能です。算数の宿題は、解けない問題があると仕上げられないので、出していないでいいです。

私は子どもの頃に算数の宿題を始めると、鉛筆が止まることがありました。「学校ではわかったのに、どうして家ではできないのだろう」とノートを見返すと、式と答えが書いてあります。「何でこんな式になったのかな。どうしてわり算なのだろう。どっちの数をわる数にすればいいのだろう」と納得に至りません。結局、その問題は手つかずとなります。

宿題を仕上げられなかったことと、担任からしかられるという二重の憂鬱を抱えながら登校する足取りは重かったものです。

教師になってからは個人面談で、「宿題がわからない」と親子喧嘩になるのです」とため息をつく保護者を何人も見ました。そんな経験から算数の宿題は出さずにいました。

しかし、最近は算数の宿題を出すようになりました。今回はそれをテーマにしました。

1 保護者に教わって仕上げる

宿題は計算ドリル。わり算の筆算が10問です。A君は全部終わっています。しかも、全問正解です。普段の学習状況から鑑みて、「よく頑張ったなあ」と感心していると、「お父さんが教えてくれたんだ」とうれしそうにプリントの裏を見せます。そこには保護者が解いた形跡がありません。

Q1

子どもにどんな声かけをしますか。

- ① 自分でやらないと本当の理解にならないよ
- ② 同じ問題が書いてあるプリントを渡しながら、自分でやってごらん
- ③ 「〇」だけつける
- ④ 教えてもらってよかったね。良いお父さんだね

保護者に教わるとは、理解ではなく、答えを教えてもらうことです。一般的には①を選ぶ教師がほとんどだと思います。

保護者が教える場合、多くは、まずは保護者が解き、それを子どもは聞いています。次に子どもが自力で解きます。途中でつまずくと、保護者は「違よ。仮の商は『7』でしょう。だって……」と助け舟を出します。

この時、子どもにはなぜそう考えるのかという疑問は生じません。なぜなら子どもは、宿題を「終わらせること」に意義を感じているからです。

教師にはそれがわかっていたので、「教わってもいいけど、自分でやるのが大事なんだよ」と諫めたのです。

②には二つの意味があります。一つは、保護者から教わったことを試す機会です。もう一つは、現実を知らせるためです。教師は保護者に教えてもらったおかげで全部できたと思っています。先ほども言いましたが、子どもは終わらせることに意義を感じています。しかし教師は、わかること、できることに意義を感じています。

③は、終わらせたことを評価しただけです。その結果、子どもは「宿題は終わらせることに



意義がある」と確信してしまっています。

人が勤勉に生きて行くためには、教え合う経験の量が左右するといえます。ここでは、わからなければ他者(保護者)に聞いてみようとした子どもの意欲を評価します。

教師はA君の取り組みに不満がありません。しかし、子どもは保護者に教えてもらったことが誇らしく、全部終わらせたことに満足しています。

教えてもらったとはいえ、子どもは宿題を全部終わらせています。それを支えてくれたのは保護者です。そこに注目します。

まずは、④のようにやってきたことを認め、素直に教わったことをほめます。帰宅すると、「先生が良いお父さんだね」ってほめていたよ」と保護者に伝えます。

認めることで子どもと先生だけでなく、保護者との信頼関係が深まるでしょう。

教師の腕前診断

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。
ベテラン先生によるケーススタディです。
こんな時、あなたならどうしますか？

2 空欄だから教えられる

一方で、空欄が目立つ宿題があります。そこを指差し、「どうしたの」と聞くと、「わからなかった」と下を向きます。

子どもは先生の次の言葉を待っています。しかられると思っているようですが、教師にはそのつもりはありません。

Q2 子どもにどんな言葉をかけますか。

- ① 「見て、「らん」と解答を渡す
- ② 「先生と一緒にやる？」と誘う
- ③ 「仕方がないね」と許す

③と言われた子どもは、しかられずに済んだことに安心します。子どもにとって、「しかられないこと」と「勉強がわかること」のどちらが重要かという「しかられないこと」だからです。

しかし、わからない・できない状態は解消されません。そこで、教師は①のように解答を渡します。宿題は既習です。わからないといつても、何から何までそうだというわけではありません。解答を見ればやり方を思い出すことがあります。教師はそれを期待したのです。

子どもの宿題忘れは、実はコミュニケーションのチャンスなのです。②のように「先生と一緒にやる？」と誘ってみます。

取り組む問題は1問だけです。1問だけなら短時間で終わりますから、子どもは苦になりません。

この時、「どこがわからないの」と聞くのが一般的です。ところが、子どもは「わからないと

ころがわからない」のです。そこで、「どこまでわかるの」と聞きます。そうすることで、わかる」ところとそうでないところの線引きが教師に見えてきます。

わかる箇所を「じゃあ、やってみて」と解かせ、「どうしてそうなるの」と考え方を聞きます。子どもは「それはね……」と説明し始めます。これが呼び水となって、「わかった。この後はできる」と自席に戻ることがあります。

既習を思い出せず鉛筆が止まります。例えば、「 $805 + 23 = 828$ 」の筆算では「 $80 + 23$ 」をします。商の十の位に「3」が立つのはわかります。次の計算は「 $20 + 23$ 」となります。今度はわかる数が3ケタに増えました。これがわかりません。この計算に特化するためにそれ以外は紙で隠します。一の位は「5」になることを教え、確認します。どうやら思い出したようです。ここまでは教師が教えました。

確実に理解するために同じ問題に取り組みます。商に3が立ち、「5」を下ろすと「25」にな



ります。子どもがわかる箇所は教師が書くことで効率的な学びとなります。「さあ、今度は自分で「 $20 + 23$ 」をやってみようか」と自力で解けるか確認します。

子どもの負担にならないように、

- ・1問だけ
- ・できる箇所を聞き、わからない箇所だけを解く
- ・同じ問題を繰り返し、できる箇所は教師が解き、出来なかった箇所を子どもに任せ

こうやって先生と一緒に「補習」をします。

宿題を空欄にしてくれたおかげで、子どもつまずきが見えます。どこまでわかり、何がわからないのかも知ることができます。

言い換えると、何を教えて良いのがわかるのです。宿題を仕上げないことで、こんなに良いことがあります。

子どもにとっては「わからないから先生に教えてもらう」という気楽な学びになります。

翌日の宿題にも空欄があります。今度は子どものほうから「先生、教えて」と言ってきます。

私は保護者に「宿題は教えなくてください。わからない問題はどこまでわかり、どこからわからないのかを聞いてあげてください」とお願いしています。もちろん、教わってきた子どもに勉強を教えるようにしますが、保護者が我が子に勉強を教えること、「なんでわからないの」と親子喧嘩になることもあります。教えないことでそれが解消されます。「明日の朝、先生に教えてもらいなさい」と先生を頼りにする保護者の一言は、教師と子どもとのコミュニケーションのもとになります。